

家族の未解決問題をめぐる親子それぞれの経験に関する質的研究

—青年期の子どもと母親が問題を維持する過程—

純 浦 優 香

1. 問題

家族問題は、以前から心理臨床場面において支援の対象として挙げられてきた。

家族とは何か 家族とは広辞苑第6版によると、血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団である。しかし、近年家族の有り様は様々で時代によって家族の捉え方や形態面・機能面も変わってきている。そのため、家族を定義しようと試みると、その難しさに当惑する（瓜生，2004）。そんな中、Jackson, D.D. (1965) は「家族とは一群のルールに支配されたシステムである」と家族を捉えている。

家族療法 家族を対象とした心理療法に家族療法がある。家族療法は、ドン・ジャクソンらによって創始され、様々な家族の問題をコミュニケーションの悪循環と捉えている。そして、特にMental Research Institute (MRI) では、この悪循環に亀裂を入れる（長谷川，2000）ことを目指し、臨床的介入を行う。家族の中で起こるパターンを家族ルールとして、その中でも悪循環とみなされる部分に介入していくことで解決を目指している。しかし、悪循環が起こっているそこでの経験についての研究があまりされていない。

青年期の子どもを持つ家族 家族ライフサイクルのなかで、夫婦間の不和がたびたび顕在化するの、子どもが青年期になったときだという調査結果がある（岡堂，1991）。青年期を、二宮（2011）は、「分岐点」と捉え、乾（2009）は、もっとも変動の大きい不安定な年代（青年期危機）であると述べている。

青年期の子どもを持つ家族にとっても変化の時でもある。ライフサイクル論の視点から、「青年期の子どもと親の葛藤は、子どもの発達課題と中年期の親の発達課題とが対立する」（岡堂，1991）という知見がある。つまり、青年期の子どもを持つ親にとっても重要な時期でもある。

しかし、家族をとりまく問題についての研究や家族個人についての定義や概念はあるものの、問題をめぐって家族それぞれがどういった経験をし

ているのか、どういった気持ちの変化があるのかの質的な検討はされていない。

個人の経験を理解することによって、臨床場面において新たな視点で意義のあることにつなげることができるのではないかと考える。

2. 目的

本研究では、家族の中でまだ解決していない問題を未解決問題とし、未解決問題を経験している母親と青年期である子どもに焦点を当てて、親子それぞれが、未解決問題をめぐってどのような経験をしているのかインタビューを通して明らかにする。

未解決問題について家族療法では、家族ルールによるものとみなすなどコミュニケーション・パターンとして捉える伝統がある。これは、いわゆる治療者の枠組みであって、渦中にある個人が意識しているものではない。

実際には、どのように経験しているのか、この点について記述していく。

以下、リサーチクエスションとして2点挙げる。

- ① 親子はそれぞれ、未解決問題をどのように捉え経験しているのか。
- ② 未解決問題と家族の発達段階は、どのような関連をもって経験されているか。

3. 方法

調査方法 半構造化面接法

調査協力者 親子三組（母親，子ども）計6名

データ収集方法 VTRでの録画とボイスレコーダーでの録音

手続き

- ① 親子に調査協力を依頼し日程を調節した。
- ② 調査の趣旨や倫理的配慮を説明し、承諾の上で二枚の同意書に署名を求めた。一枚の同意書は研究協力者に渡し、もう一枚は調査者が保管した。
- ③ 家族構成や今回話をする未解決問題の内容を確認した。詳細は、表1に示す。
- ④ 親子は、未解決問題について15分ほど自由に話しを行った。その時、調査者は、未解決問

題の把握をするために、親子に見えない形で話の様子を傾聴した。

⑤ 個別に20分ほどのインタビューを行った。

表1 研究協力者の家族構成と未解決問題

例	家族構成	未解決問題の概要
A	父親 (51) 母親 (51) 長女 (24) 次女 (22) 三女 (17)	父親が無口ぎみで、言葉が足りないことがある。
B	父親 (47) 母親 (46) 長男 (19) 長女 (16)	父親が朝、洗面所とトイレを長時間使う。
C	父親 (47) 母親 (44) 長男 (17) 長女 (14)	長男が母親に相談や話をする時、母親がその事を他の保護者に言ってしまう。

調査者協力者: []

分析方法 現象学的アプローチを採用した。

4. 結果

母親と子どもに、未解決問題をどのように経験しているのかインタビューを行ったところ、それぞれ以下のようなデータが得られた。

母親と子どものそれぞれのテーマを表2に示す。

表2 母親と子それぞれのテーマ

母親	子ども
(A) 迷い	(a) 諦め
(B) モヤモヤ揺れ動く	(b) ストレートな感じ方
(C) 諦め	(c) 配慮
(D) 母親の子どもへの理解	(d) 変化可能性
(E) 子どもとの共有	(F) 後悔
(G) 変化可能性	

母親達は、未解決問題に対して迷い、モヤモヤとした気持ちが揺れ動いていた。そして、未解決問題や当事者などへ諦めるといふ形で気持ちをおさめていた。それと同時に、母親達は子ども達を理解し、子どもと話をすることで子どもと考えや気持ちを共有していた。さらに、過去に自分が行ったことへの後悔をしながらも、未解決問題が変化できる可能性を持っていた。

子ども達は、未解決問題に対して子ども達なりに諦めを示した。また、未解決問題に関して、ストレートな気持ちを抱き、ストレートな言葉として表現していた。そして、未解決問題を通して、両親との間に立つこともあり、両親への配慮を行っていた。母親達と同様に、諦めの経験をしながらも、未解決問題が変化できる可能性も持っていた。

結果の要約として、親子のテーマを図1に示す。

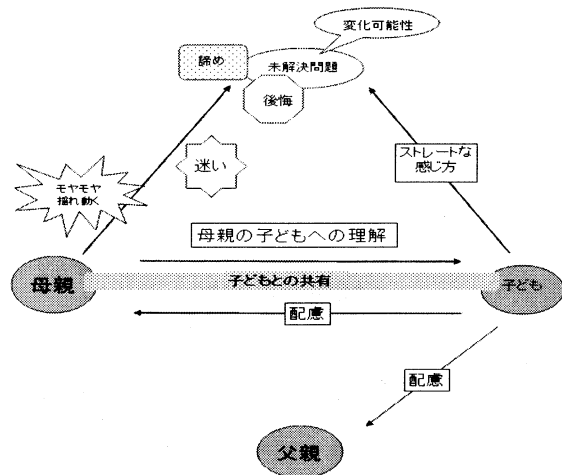


図1 未解決問題をめぐる親子のテーマ

5. 考察

母親は、子どもとの理解を深めながらも未解決問題への迷いや後悔を経験していた。それは、不連続的なものではなく、連続性を持っており、それぞれの経験が関連しているものであった。そして、妻として母親としての役割を持ち合わせて未解決問題を経験していた。

子どもは、未解決問題を経験しながらも、それは親との関係性の中で経験していることが示された。子どもは、個人としての立場を持っていないながらも、親の視点に立ち未解決問題を捉えていた。そして、親の気持ちや考えを考慮しながらも、自分の考えを持ったり、親との関係性を考えたりすることで葛藤することになると考えられた。

親子にとって家族の中で起こっている未解決問題は、それぞれの個人に影響を与えながらも、夫婦や親子の関係性にも影響を与えていることが考えられる。

母親は、未解決問題に対してシンプルで多様な経験をしていることが考えられ、子どもは、未解決問題をめぐって複雑な心境を経験していることが考えられる。このようなズレを背景として、未解決問題に対する諦めの経験がパターンとなっているのではないかと考えられる。

家族支援において、親が問題を通してどういった世界を経験しているのかを捉え把握し、青年期の子どもの、親との関係性をより詳細に理解し、青年期の子ども特有の経験を知ること重要な点となる。また、家族の問題が、どのような経験を経て維持されているのかを理解することが見立てとなり家族援助にもつながっていくと考えられる。